

A decorative border with a repeating floral and scrollwork pattern surrounds the text.

本古典集成

太平記
五

山下宏明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第七八回)
太平記 五



定価二七〇〇円

昭和六十三年四月二十日 印刷
昭和六十三年四月二十五日 発行

校注者 山下宏明

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六六)五一(業務)
東京03(二六六)五四(編集)
振替 東京 四：八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hiroaki Yamashita 1988. Printed in Japan

ISBN4-10-620378-2 C0393

目次

凡例 七

卷第三十二 一三

茨宮御位の事 一五

劍璽無うして御即位例無き事付けたり院の御所炎上の事 一七

山名右衛門佐敵と為る事付けたり武藏將監自害の事 二〇

主上・義詮没落の事付けたり佐々木秀綱討死の事 二三

山名伊豆守時氏京落ちの事 三五

直冬吉野殿と合体の事付けたり天竺・震旦物語の事 三六

直冬上洛の事付けたり鬼丸・鬼切の事 四〇

神南合戦の事 五

卷第三十三 五

京軍の事 七

八幡御託宣の事 八

三上皇吉野より御出での事 九

卷第三十四

飢人身を投ぐる事	三
公家・武家栄枯地を易ふる事	九七
將軍御逝去の事	一〇〇
新待賢門院ならびに梶井宮御隠れの事	一〇三
崇徳院の御事	一〇三
菊池合戦の事	一〇六
新田左兵衛佐義興自害の事	一七
宰相中将殿に將軍の宣旨を賜ふ事	一九
畠山道誓上洛の事	一四一
和田・楠軍評定の事付けたり諸卿分散の事	一四
新將軍南方進発の事付けたり軍勢狼藉の事	一四九
紀州龍門山軍の事	一五〇
二度紀伊国軍の事付けたり住吉の楠折るる事	一五六
銀嵩軍の事付けたり曹娥・精衛の事	一六
龍泉寺軍の事	一七四
平石の城軍の事付けたり和田夜討の事	一七
吉野の御廟神霊の事付けたり諸国の軍勢京都に還る事	一八

卷第三十五 一八九

新將軍掃洛の事付けたり仁木義長を討たんと擬する事 一九二

京勢重ねて南方発向の事付けたり仁木没落の事 一九四

南方蜂起の事付けたり畠山関東下向の事 二〇三

北野通夜物語の事付けたり青砥左衛門が事 二〇八

尾張小川、東池田が事 二四四

卷第三十六 二五一

仁木京兆南方へ参る事付けたり大神宮御託宣の事 二五三

大地震ならびに夏雪の事 二六〇

天王寺造営の事付けたり京都御祈禱の事 二六三

山名伊豆守美作の城を落す事付けたり菊池軍の事 二六七

秀詮兄弟討死の事 二七三

清氏叛逆の事付けたり相模守子息元服の事 二七七

頼宮心変はりの事付けたり畠山道誓が事 二九〇

卷第三十七 二九九

清氏・正儀京へ寄する事 三〇一

新將軍京落ちの事	三〇三
南方の官軍都を落つる事	三〇八
持明院新帝江州より還幸の事付けたり相州四国に渡る事	三一
大将を立つべき事付けたり漢・楚義帝を立つる事	三四
尾張左衛門佐通世の事	三八
身子声聞・一角仙人・志賀寺上人の事	三〇
畠山入道道誓謀叛の事付けたり楊国忠が事	三六

卷第三十八 三四七

彗星・客星の事付けたり湖水乾く事	三四九
諸国宮方蜂起の事付けたり越中軍の事	三五
九州探題下向の事付けたり李將軍陣中に女を禁ずる事	三六一
菊池・大友軍の事	三六四
畠山兄弟修禪寺の城にたて籠る事付けたり遊佐入道の事	三六七
細川相模守討死の事付けたり西長尾軍の事	三七三
和田・楠、箕浦次郎左衛門と軍の事	三八三
太元軍の事	三八八

卷第三十九 四〇三

大内介降参の事	四〇五
山名京兆、御方に参らるる事	四〇八
仁木京兆、降参の事	四〇九
芳賀兵衛入道軍の事	四一一
神木入洛の事付けたり洛中変異の事	四三三
諸大名、道朝を讓する事付けたり道誉大原野花の会の事	四三六
神木御掃座の事	四三七
高麗人来朝の事	四三九
太元より日本を攻むる事	四四三
神功皇后、新羅を攻めたまふ事	四五〇
光厳院禅定法皇行脚の事	四五五
法皇御葬礼の事	四六五
卷第 四十	四六九
中殿御会の事	四七一
左馬頭基氏逝去の事	四八三
南禅寺と三井寺と確執の事	四八四
最勝講の時鬪諍に及ぶ事	四八五
將軍薨逝の事	四八八

細川右馬頭西国より上洛の事 四九〇

解 説 四九三

付 録

太平記年表 五一五

系 図 五三四

地 図 五四〇

凡 例

一、第四分冊に続いて、この巻には卷第三十二から最終の卷第四十までを収めた。底本には、前四冊と同様江戸時代に入り古典刊行の機運が高まる中で刊行された流布本のうち、慶長八年古活字本を用いた。慶長十年古活字本・寛永版本を以って校訂を加え、その部分については頭注にことわった。一、底本は、漢字・片仮名交じりで、時に漢文表記を交えるが、本書では、これを読みやすくするため、およそ次の方針に従って改めた。

* 片仮名を平仮名に改め、漢文表記は読みくだす。ただし、文中に引用される漢詩・偈ゴの類は、作品の効果を考慮して原文の表記を残す。

* 現代国語における仮名書きの基準に従い、感動詞・代名詞・接続詞・副詞・助詞・助動詞などの多くは、仮名書きに改める。

* 仮名づかいは、歴史的仮名づかいにより統一する。

* 送り仮名は、原則として新送り仮名の方針に従う。

* 漢字・仮名の表記は、通行の表記による。なお底本には、あて字が見られるほか、「剋」と「刻」、「責」と「攻」、「甲」と「胃」など、同じ語でありながら表記の不統一がしばしば見られるが、つとめて通行の表記に統一する。

* 読みは、原則として寛永無刊記整版本の振り仮名に従うが、清濁など現代の読みと異なる語、訓読みと音読みの区別を示すべき語、それに人名・地名・年号・官名など、必要に応じて読みを補ふ、いづれも歴史的仮名づかいによって示す。

* 音便は、寛永版本に表記のあるものはそれに従い、表記のないものは『平家物語』の語りを参照して適宜判断した。

* くりかえし符号は、漢字一字をくりかえす場合の「々」を用いるにとどめる。

* 本文に、適宜、句読点や会話の「」、段落をほどこす。

一、傍注（色刷り）は、本文の読解を助けるため、簡潔に現代語訳を行ったものである。なお、主語や接続詞などは「」で、補足説明は（ ）でくくって示した。ただし、スペースの都合で、傍注とすべきものを頭注に移した場合もある。

一、頭注では、人名・事項の説明や解釈、本文の校異、傍注の補足、論旨の説明などを行った。また、各章段もしくは段落の内容について、* 印を付して簡単な説明を加えた。なお色刷りで、適宜小見出しをつけた。

一、作品の構成の理解を助けるため、各巻頭に所収年代とその内容を略述した。

一、本巻巻末の解説では、『太平記』の表現方法を、主として時間の進行順序の面からとらえ、その物語文学としてのあり方を考えた。なお、付録として、年表、系図、地図を収めた。

一、本書の校注を行うにあたり、古くは『参考太平記』『太平記抄』『太平記考証』など江戸時代の注釈をはじめ、新しくは佐伯常麿・永積安明・後藤丹治・釜田喜三郎・岡見正雄・高橋貞一・市古貞

次・大曾根章介・山崎正和・青木晃・長谷川端・増田欣の諸氏の注釈・テキスト・口語訳・研究から学恩を受けた。一々ことわらないが、ここに記して感謝する。

一、貴重な御蔵書の利用をお許しくださった横山重氏（慶長八年・十年両古活字本）および長谷川端氏（寛永版本）にお礼を申し上げる。なお、本文の作成に、今井正之助・高山利弘・長坂成行・早川厚一の四氏の協力をえたことを申しそえる。

太平記五

太平記 卷第三十二

卷第三十二の所収年代と内容

◇観応三年（正平七年〔一三三二〕）八月から文和四年（正平十年〔一三五五〕）二月まで。

◇関東では小手差原・鎌倉での足利尊氏と新田義興らとの合戦、畿内では八幡での足利義詮軍と和田・楠ら吉野朝軍との合戦、いずれもこれといった決め手がないまま世は混乱状態にあった。そうした中に持明院統の後光厳が即位、文和と改元するが、おりから京には大火があり、世はますます衰微する。時に所領をめぐって佐々木道誉の無礼に立腹した山名師氏が、吉野殿としめし合わせて挙兵、洛中に戦って義詮らを京から追い出す。しかしやがて味方の軍は疲れ、将軍方の反撃の機運も見えたので山名は伯耆へ退く。その後、安芸・周防をさまよっていた足利直冬を促し、重ねて吉野殿としめし合わせて京へ向い、洛南で戦っていったんは優勢に立つが、結局、神南の合戦に敗れる。以上、足利政権内部の紛争が、吉野殿を利用しつつとどまることなく続く経過を語る。